
君のおかげ

ぱるひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のおかげ

【著者名】

ZZマーク

N7118A

【作者名】

ぱるひこ

【あらすじ】

つまらない日常生活にあきた高校生と不思議なガキんちよの物語

第一件・バイト探し

つまらない。毎日毎日同じ事の繰り返し。何か新しい事はないかといつも考えている。しかし何も無い。だから同じ事を繰り返す。どうにかして抜け出したいこの生活。

神崎八郎・年齢十六歳・職業高校生。現在バイトの面接中。

「うちは高校生は雇わないんだよ。悪いけど帰つてくれる」

あっせりことわられた。これで五連敗。つーかそここの野郎高校生だろ！と叫びたいのを我慢して店から出て行つた。今までのつまらない生活から抜け出すためにバイトをしようと考えたがやはり無理だつた。

「こんなことで挫けてたまるか。次は何処に行こう？」

ポジティブな性格の八郎はあきらめなかつた。その時、バイト募集の張り紙が目に飛び込んで來た。八郎はそれを見るとすぐにそこには書いてある番号に電話した。

「はい。神林です」

子供の声だつた。

「あ、間違いました。すいません！」

子供の声に反射的に電話を切つてしまつた。（間違い？・・・いや、あつてるよなあ）リダイヤルで出てきた番号と張り紙の番号を見比べながら思つた。そしてまた電話をかけた。

「はい神林です」

やはり子供の声だつた。

「あの・・・バイト募集の張り紙を見たんですが・・・」

恐る恐る聞いてみた。

「バイト募集？何の事ですか？」

やはりこの張り紙の番号は間違つてているのだろう。よく見ると下方に去年の日付が書いてあつた。何時まで経つてもバイトの電話が

「こないで不思議に思わなかつたのだろうか？そんな事を考えていた。

「度々迷惑をおかけしました。すいませんでした」

「そう言って切ろうとした時電話の子供が叫んだ。

「待つた！思い出した。それ、去年僕が張つた張り紙です。全然電話こなくて忘れてました」

子供が張つたバイト募集の張り紙？「冗談じゃない！ただの悪戯か！」

怒つた八郎は電話を切ろうとした。

「貴方は採用です。今から言う所に来て下さい」

子供が言った。

第一件・バイト探し（後書き）

初めて書いた作品です。出来は悪いですが一生懸命書きました。長い目で見守っていただければ幸いです。よければ評価の方もお願ひ致します

第一件・いらっしゃい

八郎は無視して電話を切った。さつきのバイトの面接の事も有り怒りはピークに達していた。すると不意に電話が鳴った。

「もしもし！」

随分と乱暴なでかただつた。

「いきなり切らぬいで下さい。まだ住所言つてませんよ」
さつきのガキだ。

「うるせえ！何が採用です。だーふざけんな！」

大声で叫んだ。

「ふざけてんのはお前だ！」

いきなり後ろから怒鳴られた。

「採用されなかつた腹癒せか！店の前でさわぎやがつて！」

さつきの店の店長だ。ゴキ！おもいつきり殴られた。

「とつとと失せろ！－！」

八郎は走つて逃げた。

「何だ、僕の家の場所解つてたんですね」

うずくまつて肩で息をしていると電話から声がした。

「何？家？」

八郎が立ち上がると田の前に大きな家があつた。

「早く入つて来て下さい」

八郎は迷つた。これ以上子供の悪戯に付き合いたくない。しかしこのまま立ち去つたら後悔する気がした。そして、もしかしたら今までの生活から抜け出せるかもしね。そう思った時には扉を開けていた。

そして、家の中に入つて中を見回してみたが、家の中には生活用品が何もなかつた。さらに、そこには誰も居なかつた。

「階段を上がつて来て下さい」

二階から声がした。指示のままに階段を上がつていった。一段一段上る」とに階段がギシギシなつた。全部で十三段あるうちの七段目を踏んだ瞬間突然床が抜けた。

「ああ。何をやつているんですか」

上から声がした。片足がはまつたままハ郎は上を向いた。そこには誰も居なかつた。

「早く来て下さい」

ハ郎ははまつている足を引き抜いてさらに上つて行つた。そして上りきつたところには扉が一つあつた。

「どうぞ。開いてますから入って下さい」

八郎は一呼吸おいてから扉を開けた。そこは下の階と違った生活感があふれている部屋だった。しかし誰もいない。

「よくいらっしゃいました」

扉側に背を向けている大きなソファーから頭がぞうこんだ。

「突つ立つてないでこっちに来て下さい」

ソファーの正面に八郎は周った。そこに居たのは中学生ぐらいの子供だった。

「来るのが遅いですよ」「お前があんな悪戯をしたのか」

「悪戯なんてしてませんよ。本気ですよ」

「お前みたいなガキんちよがバイトの募集!？」

八郎はおもいつきり笑つてやつた。

「失礼な人ですね！それにお前でもガキんちよでもありません。僕は神林真昼です。呼び方は何でもいいですよ」

真昼は笑いながら言つた。

「呼び方なんてどうでもいい。本気だと？何の仕事をするつて言つんだよ」

「あれ？ちゃんと見なかつたんですか？」

真昼が驚いた顔をしながら言つた。「何を？」

「バイトの内容ですよ。ちゃんと家事の手伝いって書いてあつたでしょ。別に店で働くわけじゃないですよ」

確かに書いてあつたかもしれない。しかし、ろくに確認せずに電話したため、内容はよく見ていなかつた。

「家事の手伝いって・・・お前の両親は？」

「親なんて別にいいでしょ。それよりも貴方の名前は？後一お前じやなくて、ま・ひ・るです」

最後だけわざとゆつくり言つた。

「神崎八郎・・・」

「では、八郎さん採用です。明日から来て下さい」

「来て下さいって俺家事なんて何もできないよ」

「大丈夫です。詳しい事は明日話します。土曜日ですしおから来て下さい。じゃあもう帰つて下さい」

笑顔で追い返された。

家に帰つた八郎はこの急な展開をいまいち理解出来ないでいた。その時携帯が鳴り始めた。

「もしもし」

「よう！ハチ！またバイト探ししてんの？」

友人の昭彦だ。

「いや、バイトは決まつたんだけどさあ、なんか変な感じでさ」

「何？なんかやばい仕事なの？お母さんはお前さんの事が心配で心配で」

昭彦が茶化してきた。

「ふざけんなよ」

八郎が低い怒つた声で言つた。

「なんだよマジでやばい仕事なの？」

心配そうな声で昭彦が言つた。

「いや、やっぱいんじゃなくて変なの。雇主が中学生くらいの子供なんだよ。しかも仕事の内容が家事の手伝いだし」

「中学生の家事の手伝い？たしかにな。まあ、バイトが決まつただけいいじゃん。変な事言つからヤクザか何かの仕事かと思つたよ」

昭彦が笑いながら言つた。

「そんなわけ無いだろ？。そもそもお前がバイト紹介してくれないからこいつなるんだ！」

「無茶苦茶言つなよ！まあ頑張れよ」

「ああじゃあな」電話を切つて大きな溜め息をついた。

「はあー。やっぱりやめとけば良かつた」

しかし、心の中では喜んでいた。バイトが決まつたことと、何かが起ころのではないかという期待で。（そうだ・・・母さんに電話しておかないと）八郎は携帯を開いてダイヤルした。

「はい。神崎です。現在電話にでられません」

留守電だつた。

「母さん。男の人と会つてゐる時にごめん。俺、明日からバイトいくから。まあ母さんには関係無いだろうけど・・・じゃあ」

第五件・クビ？

翌日八郎は朝の九時から真昼の家を訪れた。

（なんだよ、朝から来いつて言ってたくせにまだ寝てんのか？）い
くらチャイムを押しても誰も出でこなかつた。（帰ろうかな）そつ
思つた時電話が鳴つた。

「そんなんに何回もチャイム押さなくてもわかりますよ
真昼からだつた。

「お前なー聞こえてるなら早く出て来いよー。」

「鍵、開いてますよ」

試しにドアノブを回してみた。開いた。

「早く来て下さい」

「鍵ぐらい閉めとけよ」

「別に僕の勝手でしょ」

「泥棒入つたらどうすんだ・・・」

また階段にはまつた。

「八郎さんつてバカ？」

電話からでなく上から声がした。パジャマ姿の真昼がいた。

「どうも・・・」

八郎がばつの悪そうな顔をして言つた。

「人の家壊して遊ばないで下さい」

真昼が笑いながら言つた。

「別に遊んでねえよ！」

足を抜きながら言つた。それを見て真昼はあぐいをしながら部屋に入つて行つた。その後について八郎も入つて行つた。

「来るの遅いですよ」

またソファーに隠れて見えなくなつていた。正面に周つた。

「まだ九時だぞ」

「僕の朝は七時からです。一時間遅刻です」

真昼が真剣な顔で言った。

「そんな無茶苦茶な」

「雇主は僕ですよ? しっかり指示にはしたがつて下さる。ま、それはいいとして仕事の内容を説明します」

仕事の内容は以下の通り

- 一・時間は七時から十時まで
- 二・基本的には留守番
- 三・指示には従うこと

以上。

「・・・留守番だけ?」

「はい。あ、でもたまに掃除とかもしてもらいますよ。簡単でしょ」

「う~」

「いや簡単だけじゃあ・・・それって家事手伝いってことの?」

「さあ? でも仕事が留守番じゃ誰も来ない」と思つて

笑いながら言つた。

「確かにね。でもさ七時から十時に留守番つておかしくない?」 「人にはいろいろありますからね

少し暗い声で言つた。

「今まではどうしてたんだよ?」

まずいと思つた八郎は話題を変えた。

「隣の家のおばさんに頼んでました。すごい文句言われてバイト募集したのに誰も来なくて。間違い電話やいたずら電話は増えましたけど・・・」

(多分俺と同じよつなことだらつな) 八郎が苦笑いをしながら思つた。

「とつあえず今日は掃除やつて下せー」

「えつ! ? 仕事は留守番だら」

「さつを言つたでしょ。たまに他の事もやつてもいいつて」 確かにそう言つていた。

「じゃあ始めちやつて下せー」

ハ郎は渋々掃除を始めた。だがあまりやつたことが無いハ郎は余計に部屋を汚すことになった。

「ちょっと待つた！何やつてるんですか！？頼んだのは掃除ですよ！誰が汚せつて言いましたか！」

真昼が本気で怒った。

「もういいです。ハ郎さんが壊した階段を直してきて下さーい」

トンカチと釘と板を渡された。

「わがまま言うなよ。だから家事はできないって言つただろ」「予想外でした。ここまで使えないとは。クビにしますよ」

「目が本気だつた。その時丁度いいタイミングで電話がかかってきた。

「まったく。ちゃんと直して下さいよ」

（クビにならずに助かった）と思いながら部屋を出た。

第六件・初仕事

しばらくして階段を直していくと真昼が部屋からてきた。

「ハ郎さん。出かけてきますので留守番よろしくお願ひします」

大きな袋を抱えていた。

「それ終わったら休んでいて下さい」

真昼が階段を降りて行った。下から三段目の所で階段にはまつた。

「ここにもお願いします・・・」

顔が真っ赤になっていた。

「はいはい。何時頃帰つて来るんだ?」

下に降りて行きながら聞いた。

「わかりません」

真昼は必死に足を抜こうとしていた。

「まったく。やっぱりガキンちよだな」

足を抜いてあげた。

「・・・どうも」

顔がさらに赤くなつた。

「車に気をつけるよ」

真昼が走つて出て行つた。

「仕事がまた増えた・・・」

仕事が全て終わつた頃には十一時を過ぎていた。時間がかかつたが掃除もしておいた。今度は何とか出来た。（まだ帰つて来ないのか）真昼が出て行つてから一時間以上経つていた。（あれ？メール来てる）携帯が光つていた。真昼からだつた。

（遅くなります。お昼は勝手に何か食べて下さい。冷蔵庫の中の物は使っていいですよ・真昼より）

（ん？何でアドレス教えてないのに・・・）不思議な事だ。しかし、

お腹が空いていたので余り考えなかつた。冷蔵庫を開けてみたが中は空っぽだつた。（えーと、どうしたら？）出かけるわけにもいかず帰りを待つしかなかつた。

「ただいま～」三時を過ぎていた。

「八郎さんお疲れ様でした。あれ掃除もしたんですね」

遊んできたのか服が汚れていた。

「お前、なんで俺のアドレス知つてんだよ。それに冷蔵庫の中何もなかつたぞ」

「・・・」

真昼が何も答えなかつた。少しふて腐れた顔をしていた。

「何か言えよ」

「・・・お前じゃありません」

抱えていた袋を片付けながら言つた。

「別にいいじゃん。そんなこと」

「よくありませんー名前は重要なんですー！」

本気で怒つていた。

「わかつたから怒るなつて。じゃあ真昼。なんで俺のアドレス知つてんだ？」

「そんなの簡単ですよ。勝手に見たからです」

笑顔で答えた。それを聞いた八郎は呆れてしまつた。

「お前なんで勝手に見るんだよー！」

「真昼！」

「真昼なんで勝手に見るんだよー！」

「だつて知らないと不便でしょ？」

「～」

呆れて何も言えなかつた。

「あれ？冷蔵庫の中何も無いじゃないですか。随分食べましたね」

冷蔵庫の中を見て笑いながら言つた。

「食つてねえよ・・・」

「え？」

「だからー何もなかつたの！」

「ああそうでしたか。じゃあ買い物行きましょひ

「そう言つて真昼はさつさと出て行つてしまつた。（マイペースだな
あ～）八郎も後を追つて出て行つた。

第七件・怪我

結局あの後も真昼に振り回された八郎は家に帰つて今日一日を振り返つて日記をつけていた。

今日は非常に疲れた。確かに普通の生活とは違うがなんだか望んでいたものとは違つ。まあしばらくは頑張つてみるとしよう

次の日八郎は学校にいた。

「ようハチ！」

後ろから声をかけられた。友達の昭彦だ。

「よう昭彦。朝っぱらから元気だな」「なんだよ元気ねえな」

昭彦がつまらなそうな顔をして言つた。

「別に。いつもだろ？」「

めんどくさいやうな顔をしながら言つた。

「確かに。それよりバイトどうだったんだよ」「

「それがさあ

八郎は昨日の事を話した。

「へえ。何か面白やうなバイトだな」「

「お前はやらないからそんなこと言えるんだよ。あいつの相手は疲れるぞ」「

「今度会わせてくれよ

「あいつがいって言つたらな」「

「よし。約束だぞ」「

昭彦が走つていった。（ものずきな奴だ）

「おい。もう授業始まるぞ」

後ろから担任に言われた。教室に入つて行つた。

学校が終わった八郎は真昼の家に行つた。

「あれ？まだ時間じゃないですよ」

商店街を歩いていたら真昼に会つた。また、あの袋を抱えていた。

「暇なんだよ」

真昼がジッと顔を見てきた。

「な、何だよ」

「どうせ補習をぼつて逃げて来たんでしょう？」

当たつていた。

「そ、そんなわけないだろ」

動搖していた。

「まあいいですけどね。それより荷物、持つて下さい

買い物袋を持つていた。

「また買い物したのかよ」

「いいから持つて下さい。気がつかない人はモテませんよ」

痛いところをつかれた。

「つるせえ。ガキンちょに言われたくないね」

スネをおもいつきり蹴られた。

「早く来て下さい」

うずくまつていると目の前に買い物袋を置いてさつと行つてしまつた。

ボーッと過ごしているところの間にか七時になつていた。

「留守電頼みますよ」

大きな袋を抱えて出て行つた。（あれ何だ？）すくへ氣になつた。毎回出かける時に持つている。

よく考へると昨日の買い物の時も持つていた。

ずっと考へているとふと写真が目に飛び込んで來た。（何だこれ！？）真昼の両親と思われる人の顔が破かれていった。（どういう事だろ？）考へているとしたから物音がした。（泥棒！？）近くにあつた掃除機のホースを持ってゆっくり下に降りて行つた。電気がつ

いてあらず真っ暗だった。階段を降り終わった瞬間にきなり猫が飛びかってきた。

「おわっ！！なんだよ猫かよ！びっくりしたなあー・・・」

電話が鳴った。着信アリのテーマソングだった。

「！！！」

声にならない悲鳴が出た。玄関の方からだった。（なんだよ。たくよー）少し膝が震えていた。玄関に行くと真昼の携帯が落ちていた。

「も、もしもし・・・」

怖がりながらでた。

「どうかしたんですか？声が震えますよ」

真昼だった。

「なんだ真昼かよー。なんだよ」

ホッとした。

「ちょっと怪我したんで迎えに来て下さい」

「はあっ！？怪我？大丈夫なのかよ！？」

恐怖が完全に吹っ飛んでしまった。

「それほどでもないんですけど。とりあえず来て下さい」

遊びに誘つような軽さだった。場所を聞いたハ郎は必死に走つて行つた。

「ま・真昼。だ・大丈・・夫・・か？」

全力で走つて来たせいで息が上がつていた。

「そんなに急がなくても良かつたですよ」

真昼が壙にもたれかかっていた。右腕から血が流れていた。下には血だまりがあつた。

「馬鹿野郎！ 怪我したから迎えに来いつて言われたら慌てるだろう！ 救急車呼ぶぞ！」

「そんなに大怪我でもないですから救急車はいいですよ」

「何がいいだ！ このままじゃ死ぬぞ！」

八郎が本気で怒つた。その時真昼の横に見た事の無い生き物が居た。

「真昼。この変な生き物何だ？ これにやられたのか？」

真昼が驚いた顔をした。

「八郎さんこれ見えるんですか？」

「えつ？ 見えるけど？」

（変な事言つたか？）

「良かつた。これでそれにトドメをさして下さい！」

真昼が真剣な顔をしてあの大きな袋を突き付けてきた。

「こ、殺す！ 何で！」

今までと違う雰囲気の真昼とその言葉に八郎は驚いた。

「そうしないといけないんです。早く！」

急かされて袋を開けると中には刀が入つていた。

「な！？ 刀！？」

「早く！ 逃げないうちに！」

八郎は刀を抜いた。ためらつた。なぜこの生き物を殺すのかわからなかつた。しかし、ためらつていてるうちに真昼が刀を奪つた。そしてその生き物を勢いよく刺した。するとその生き物が光りになつて消えた。

「うつ……」

腕から血がでてきた。

「真昼！大丈夫か！？救急車呼ぶぞ」

「お願い……救急車は呼ばないで……」

それを最後に真昼は気を失った。

「うう。……八郎さん降ろして下さい」
真昼をおぶつて八郎は全力で走っていた。

「真昼。気がついたか」

「ご迷惑をおかけしました。もう大丈夫です」
真昼を降ろした。

「さつきの何だつたんだ？」

「それは……とりあえず家に帰つてから話しましょう」
真昼が笑つた。

「……」

八郎が真剣な顔で真昼を見た。

「……ちゃんと話しますよ……」

笑うのをやめた。

「傷、大丈夫か？」

「もう平気です。少し痛むけど」

ははつと小さく笑つた。それを見ると八郎は歩いて行つた。後ろを
ゆっくり真昼が付いて來た。

家に戻つて來た真昼と八郎は黙つたまま座つていた。

「あの、とりあえず着替えたいんですけど……」

申し訳なさそうに言つた。

「ん。早く着替えろよ」

「・・・出て下さいよ」

真昼が困ったような顔をした。

「なんで？」

八郎が不思議そうな顔で聞いた。

「なんでって・・・女の子の着替え見る気ですか？八郎さんのエッ

チ」

「・・・」

八郎が考え込んだ。

「女・・・の子？って誰が？」

ゆっくりな口調だった。

「誰つて。一人しか居ないじゃないですか！僕ですよ僕！」

八郎の思考がしばらく停止した。

「は！？冗談言つてんなよ。早く話聞きたいんだから

「冗談つてどういう意味ですか！とにかく早く出て下さい！」

追い出された。しばらく考えたがやはり納得いかなかつた。（女の子？確かに女の子っぽい顔してるとは思つてたけど・・・やつぱり冗談だよな）試しに中を覗いて見た。顔の中心に田嶽時計が飛んで来た。

「！！！」

真昼が怒つて何か言つていたがわからなかつた。（嘘だ。女の子があんな力振り回したりしないだろう）また考え込んだ。鳴声が聞こえた。いつの間にか猫が足下に居た。

「まだいたのかお前。なあやつぱりあいつ男だよな

猫に話しかけていると中から真昼がでてきた。男の子の様な格好をしていた。

「何やつているんですか？もういいですよ

中に入つて行つた。

「さて何から話しますか？」

「お前は何者だ？」

「神林真昼」

「・・・何をやつしているんだ？」

「化け物退治。退治屋です」

「退治屋？じゃああの変なのを殺したのも仕事なのか？」

「はい。でも殺すわけでは無く浄化するんです」

「浄化？」

「はい。あれは人の魂に何かの悪い影響があつてできた物なんです。だからあの刀でその悪い部分を浄化してあげるんです。まあ、信じてもらえるか分かりませんけど」

真昼が少し笑つた。

「確かに信じれないな」

「まあ、普通はそうでしょうね・・・」

真昼が少し悲しそう表情を見せた。

「信じられない。だからお前の仕事に今度から付いて行く。いいな」「えつ！？」

真昼が驚いた顔をした。

「また怪我したから迎えに来つて言われても困るしな」「だ、ダメですよ！危ないですよ！」

真昼は必死に説得していた。

「女の子なんだろ？女の子にだけそんな危ない事をせらんないつうの」

八郎が笑つた。そして不思議な事に気付いた。

「そういうえば真昼傷は？」

氣絶するほどの怪我だったのにもう痛い素振りを見せていなかつた。

「昔からなんです。怪我してもすぐに治るんです」

「変わってるな」

「気味悪がらないんですか？」

真昼が驚いた。

「そんなこと言つてたらさつきの話だつてそつだろ？まだ完全に信じたわけじゃないけど」

「まあ・・・でも本当に変わりますねハ郎さんって

ハ郎が笑った。

「ははっ。俺はこの生活から抜け出したいだけなんだよ。そのチャンスがやっと来たかもしねないんだ」「やつぱり変わってる。でも本当に付いて来る気ですか？」

「ああ」

「死ぬかも知れませんよ」

「ああ」

「本当にいいんですね？」

「しつこいー」

「わかりました。明日から手伝ってもらいます。でもバイト代は増やしませんよ」

「わかつてゐるよ」

「じゃあ今日是非帰つてこんですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7118a/>

君のおかげ

2010年10月23日13時28分発行